



▲第3回白壁賞を受賞した西俣嘉人氏.



▲西俣氏(左)にお祝いの言葉を述べる八尾恒良氏(右).



▲満員となった第37回「胃と腸」大会会場(ホテルニューオータニ博多).

第3回白壁賞は西俣嘉人氏ら、 第22回村上記念「胃と腸」賞は 末兼浩史氏らに

10月28日(火)、ホテルニューオータニ博多で行われた第37回「胃と腸」大会の席上、第3回白壁賞と第22回村上記念「胃と腸」賞の受賞式が行われた。第3回白壁賞は西俣嘉人・他「Crohn病診断のための主要所見と副所見：縦走潰瘍—X線診断の立場から」(胃と腸 31: 465-478, 1996)に、第22回村上記念「胃と腸」賞は末兼浩史・他「非腫瘍性胃RLHと胃MALTリンパ腫の経過観察例の検討—*Helicobacter pylori*との関連を中心に」(胃と腸 31: 973-986, 1996)に贈られた。

当日、司会の牛尾恭輔氏(国立がんセンター中央病院放射線診断部)から、まず白壁賞受賞者の発表があり、早期胃癌研究会代表の八尾恒良氏(福岡大学筑紫病院消化器科)から受賞者代表の西俣氏に賞状と賞牌が、医学書院からは副賞の賞金が贈られた。八尾氏は“白壁彦夫先生が、鹿児島の西俣先生ご一門を共同研究者として大変高く評価されていたことを思い出しますと、この度の受賞は白壁先生のご遺志に沿ったものと考えています”と述べた。

続いて、選考委員を代表して小池盛雄氏(東京都立駒込病院病理)が、白壁賞は消化管の形態、診断学の進歩に寄与する優れた研究に与えるという方針のもと、「胃と腸」31巻に掲載された全論文ならびに応募のあった他雑誌掲載の1論文の選考対象から、編集委員の投票の結果、本論文が選ばれたと選考経過を報告した。

受賞者を代表して西俣氏は“小生は昭和46年、当時順天堂大学にいらした白壁先生から、癌研病院の主任研究員をされていた中村恭一先生(現：東京医科歯科大学病理)の下で勉強させていただく機会を与えられ、消化管病理のみならず中村先生の考え方などを学ぶことができました。昭和60年から白壁先生、中村

先生らを中心として、当時「潰瘍性大腸炎研究会」、現在「白壁フォーラム」と称しています、IBD 研究会が始まり、われわれもその一員として参加させていただきました。その会で当時話題となりはじめた Crohn 病、潰瘍性大腸炎、腸結核を主に、X 線、内視鏡、病理を 1 例ずつ時間をかけて厳しい討論を続けてまいりました。われわれのグループの創設者で、またリーダーであった故・政信太郎が、約 30 年前に白壁先生のご指導の下で「胃と腸」の多発性潰瘍による変形というものをテーマに研究を始めて以来、消化管の変形学というもののがわれわれのグループの大きなテーマの 1 つとして現在まで続いています。また、白壁先生、中村先生から、部位の同定、点と点の対応ということを絶えず言われていましたが、癌研病理時代に切除標本の全割切片作製の手法を学んだことを用いて、またわれわれが以前から行っていた摘出標本および固定標本レントゲノグラムを組み合わせることによって、変形とそれに対応する病理所見をほぼ解決したと思っています。現在消化管の形態診断は X 線診断よりも内視鏡診断が主流になっていますが、この時流の中で地味な変形学の研究が白壁賞の受賞という形で評価されたことを非常に光栄に思っております。本研究のみならずわれわれの仕事の日ごろ、影で支えてくださっている本病院の放射線部、病理部の皆様にお礼を申し上げます”と挨拶し、満場の拍手を受けた。

続いて、村上記念「胃と腸」賞の贈呈が行われた。八尾氏から賞状と賞牌が、医学書院から副賞の賞金が、受賞者代表の末兼氏に贈られた。八尾氏は“今後いっそう、飯田三雄先生(川崎大学内科)ご一門と形態学に精進されることを願っております。”とお祝いの言葉を述べた。

小池先生からは、「胃と腸」賞は消化器疾患の病態解明に寄与したものであるという基準のもと、「胃と腸」31 巻に掲載された全論文の中から選ばれたと、選考経過が述べられた。

受賞者を代表して末兼氏は“大変名誉な賞をいただき恐縮しております。今回、*Helicobacter pylori* と MALT リンパ腫について、われわれは長期経過例を振り返り検討いたしました。慢性胃炎 RLH の延長上に確かに MALT リンパ腫がありまして、その MALT リンパ腫の腫瘍性の進行と *Helicobacter pylori* はちょうど逆相関にある、つまり浅いものは *Helicobacter pylori* の関連が強く、深く潜った低悪性度 MALT リンパ腫には *Helicobacter pylori* が減少して、ほとんどいないという事実をつかみました。まとめた本人が力



▲第 22 回村上記念「胃と腸」賞を受賞した末兼浩史氏。



▲八尾氏(右)から賞状を受ける末兼氏(左)。

不足で検討内容は反省点が多いのですが、賞をいただいたということで、今後は賞に恥じない努力が必要と思ひ、賞の重みを痛感いたしております。お世話になりました九州大学第 2 内科消化器研究室、福岡日赤などの各スタッフの皆様方の、1 例 1 例を大事にして、患者さんとともに悩み、努力した蓄積に対する賞だと思っております。まとめに際しての公正な病理診断をいただいた岩下明德(福岡大学筑紫病院病理)、八尾隆史(九州大学第 2 病理)の両先生、また臨床上、病理上適切なアドバイスをいただきました中村昌太郎先生(九州大学第 2 病理)、またいつもご指導いただいている恩師の飯田三雄先生のご指導のもとにできあがった業績ですので、この場を借りて感謝の意を述べたいと思います。ありがとうございました。”と受賞の喜びを語り、盛大な拍手を受けた。